

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ドラマチックな運命をたどった人だけが短歌を作れるのだろうか。もちろんそんなことはない。

確かに、人生上の〔1〕できごとは、人に歌を詠ませる。恋愛の歌である相聞歌や人の死を悲しみ悼む挽歌が、短歌史のなかでも〔2〕ウエートを占めてきたことは間違いない。

が、一方で、日常の中のまことに〔3〕感動からも、歌は生まれる。私はこれは、短歌の特徴であると同時に、大変な強みではないかと思う。

長編小説にはならなくても、確かに私たちの心を揺さぶってくれる〔4〕感動が、日常の中にはある。そういったミニサイズの感動にまで、伸縮自在に対応できるのが、短歌なのだ。

ミニサイズ、などと言うと語弊があるかもしれないが、感動の質の深さは、サイズには関係ない。まことに〔5〕感動を歌っていないながら、ある時は私たちに長編小説以上の「読む」喜びを与えてくれる作品が、数多くある。

我がやどのいささ 群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも (巻十九・四二九一)

『万葉集』にある大伴家持のこの一首には、ただひたすら静かな時間が流れている。私の家の、細いささやかな竹が群がっているところに吹いている風。その音のかすかに聞こえてくる、この夕暮れであることだ……。

風というのは、それ自体が目に見えるわけではなく、それ自体が音を伴っているわけでもない。「ア」何かを揺らしたり、動かしたりすることによって、その存在は明らかになる。

屋根の瓦を吹き飛ばすような大風から、小川の表面を波立たせるほどのそよ風まで。「イ」風の強さのイメージは、「何を」動かすかで決まる。「ウ」細いなよやかな竹を、かすかに鳴らすほどのささやかな風、それがこの歌に詠まれている風である。このうえなく繊細で、しかも何か親しい感じがする。「エ」この夕べ、作者だけが聞いた風のささやき。

「聞く耳持たぬ」という慣用句があるけれど、この場合は逆に「聞く(ことのできる)耳」を持っていたからこそ、聞こえた音なのだ、と思う。聞く耳、そして感じる心を持っていないと歌は生まれない。「オ」同じ作者が同じ状況におかれたとしても、世間の雑事に忙しい思いをしていたり、心に余裕のない日常を送っていたりしたら、たぶんこの風の音は聞こえなかつただろう。

この歌が詠まれたとき、家持は三十代の後半だった。越中守として約五年を勤めたのち都へ帰り、それから一年半ほどがたっている。越中時代は、若い政治家としてはりきっていたが、このころ都では徐々に藤原氏の勢力が大きくなりつつあった。年齢的にも仕事のうえでも、ふと人生を考える時間を持つようになったのだろう。がむしやりに人生を走るのではなく、ちよつと立ち止まって自分自身を見つめなおす。そんな時間が、人の心を柔らかに敏感にする。

「この夕かも」の「かも」という言葉には、風のささやきを聞くほど、静まりかえった夕暮れであることよ、というのに加えて、静まりかえった我が心であることよ、という詠嘆が含まれているのではないだろうか。

「いささ」「かそけき」というS音の響きあいが、一首の風のイメージを際立たせている点も見逃せない。

現代短歌からも、例をとってみよう。

こんなにも湯呑茶碗はあたたかくしとるもとろに吾はおるなり 山崎方代

あたたかい湯呑茶碗。そのぬくもりに、自分でも意外なほど、じんときてしまった。誰かに説明して〔6〕気もするが、とてもうまく伝えられそうにない……。なんだか照れくさいような、どうしたらいいかわからないような、こつぱずか

しい感じ。それが「X」だろう。

口に出して言ってしまうたら、7と、人は笑うかもしれない。どこにでもある演歌的シーンと、8がもしれない。そんなことは、作者自身が一番よく知っている。にもかかわらず「こんなにも湯呑茶碗はあたたか」いのである。あたたかさが心に染みずには、いられないのである。

ありふれた身近な安らぎに、結局、人の心は戻ってくるのだということ、作者自身が9歌っている。「X」は、その過程の屈折を含んだ表現なのだ、と思う。一首のなかで実にうまく10言葉だ。

湯気をたてている湯呑茶碗。日本人なら、何度となく出会うものの一つである。たいていの場合は、そのたびにそのままになってしまふことがほとんどだろう。が、やはりこうして一首が生まれる契機というものが、そこにはひそんでいる。

(俵万智『短歌をよむ』による。一部改変)

注 越中守 えつちゅうのかみ。越中国(現在の富山県)の国守。

問一 傍線部①「伸縮自在」の意味として、最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

- ア その時その場に応じて適切な手段をとること
- イ 自由に自分の意志を伝えること
- ウ 長さの単位がいろいろで簡単に計測できないこと
- エ 思いのままに調節ができること
- オ 思いのままに現れたり消えたりすること

問二 傍線部②「語弊」の意味として、最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

- ア 言葉が適切であればどのような内容でも理解されること
- イ 文化の違いがあるために意味が変わってくる言葉の使い方
- ウ 言葉を用いて神様に願いを捧げること
- エ 言葉の選び方によっては同じ内容でも伝わり方が違うこと
- オ 言葉の使い方が適切でないために誤解を招きやすい言い方

問三 波線部の「聞く耳持たぬ」という慣用句は「私たちの忠告に全く聞く耳を持たない」などと使うが、次の慣用句を使う文のうち、正しくないものを二つ選んで、符号で答えなさい。

- ア 一時は肩で風を受ける勢いだつた。
- イ りつばな子どもをもつて、わたしも鼻が高い。
- ウ かの女はいつも歯に衣着せて痛烈な批判をする。
- エ 人を見る目があるのは、かれの長所だ。
- オ 大事な試合を前にして腕が鳴る。

問四 空欄1～5に入る最も適当な語を、次の中から選び、符号で答えなさい。同じ語を一度以上用いてもよい。

- ア 多くの
- イ 必要な
- ウ 大きな
- エ 不必要な
- オ 小さな

問五 次の一文を抜いてある。本文中「ア」も「オ」のうち入るべき最も適当な箇所を選び、符号で答えなさい。

耳元でふっと内緒話をされたような、そんな印象だ。

問六 空欄6～10に入る最も適当な語句を、次の中から選び、符号で答えなさい。なお、符号は一度だけ選択しなさい。

ア 作用している イ 批判する ウ 共感を待たい エ とまどいをもって オ ありふれた感傷

問七 空欄「X」に入る最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア こんなにも イ 湯呑茶碗は ウ あたたく エ しろもどろに オ 吾はおるなり

問八 右の文章の著者である俵万智の歌集を、次の中から選び、符号で答えなさい。

ア みだれ髪 イ サラダ記念日 ウ 桐の花 エ 赤光 オ 一握の砂

二 次の問いに答えなさい

問一 ①～⑳の傍線部のカタカナに当てはまる漢字を、それぞれのア～オの中から選び、符号で答えなさい。

- ①カ説を立てる。 ②カ題に取り組む。
 (ア 課 イ 可 ウ 架 エ 化 オ 仮)
- ③人員をカク保する。 ④カク差が広がる。
 (ア 確 イ 格 ウ 穫 エ 核 オ 覚)
- ⑤コウ妙な手段。 ⑥けがのコウ名。
 (ア 功 イ 考 ウ 工 エ 巧 オ 貢)
- ⑦キ道を修正する。 ⑧パソコンをキ動する。
 (ア 軌 イ 紀 ウ 企 エ 規 オ 起)
- ⑨キョウ異的な記録。 ⑩戦争のキョウ威
 (ア 驚 イ 脅 ウ 恐 エ 競 オ 響)
- ⑪伝統のケイ承。 ⑫社会へのケイ鐘。
 (ア 経 イ 敬 ウ 警 エ 系 オ 継)
- ⑬紛争がカク大する。 ⑭政権をカク得する。
 (ア 画 イ 獲 ウ 草 エ 拡 オ 穫)
- ⑮好キを逃す。 ⑯綱キをただす。
 (ア 器 イ 機 ウ 紀 エ 奇 オ 期)
- ⑰シ命を帯びる。 ⑱シ名を受ける
 (ア 使 イ 支 ウ 司 エ 旨 オ 指)
- ⑲所シンを述べる。 ⑳初シンを忘れない。
 (ア 神 イ 心 ウ 信 エ 新 オ 進)

問一 ①～⑩の四字熟語の□に当てはまる漢字をア～トの中から選び、符号で答えなさい。

- ① 一意□心 ② □故知新 ③ 呉越□舟 ④ 四分五□ ⑤ 秋霜□日
⑥ 順□滿帆 ⑦ 醉生□死 ⑧ 朝三□四 ⑨ 東奔□走 ⑩ 竜頭蛇□

ア 一 イ 温 ウ 音 エ 逆 オ 春
カ 西 キ 千 ク 専 ケ 足 コ 同
サ 晩 シ 尾 ス 風 セ 暮 ソ 万
タ 滿 チ 夢 ツ 無 テ 烈 ト 裂